

文学ドキュメンタリー①

老舎はなぜ、自ら命を絶ったのか

老舎の章 Part 2

中国共産党の広告塔として

老舎は帰国を決意し 1949 年 10 月にサンフランシスコを発ち、途中で台風に遭遇しながらも無事 12 月 9 日に天津の港に着いた。なぜあれほどしぶっていた帰国を決心したのか。それについては「趙清閣の章」で書くことにして、とにかく老舎は北京に着いたときも趙清閣と一緒にになれるかもしれない、という淡い期待を抱いていた。晩年の趙清閣と交流のあった洪鈴の聞き書きの中から引用する。（洪鈴は、劇作家で演出家洪深(1894-1955)の娘。趙清閣と洪深は「文協」でともに活動した同志だった。）

老舎が K、妻の胡絮青が H 某某、老舎の息子が XX で書かれている。

老舎が北京に来たとき、H 某某（彼の妻）はまだ北京には来ていませんでした。彼は、北京に来るようと私を呼びました。彼は家を買って妻に与え、彼らを落ち着かせるつもりでした。自分はホテルで暮らしていました。私は手紙を書いて彼に、「あなたは帰って来たばかりだから国内の状況を理解していません。新しい婚姻法があるので「あなたが離婚しない限り、私はあなたとは会えないのです」と、言いました。H 某某は北京に来てから彼にお金を要求しました。彼は約 20 枚の金の延べ板を与えました。お金を全部渡したら事が解決すると無邪気に考えたのです。しかし、当然のことながら H 某某が彼を手放すことはありませんでした。（原文 A）

金の延べ板 20 枚がどのくらいの価値を持つか見当がつかないが、相当の価値があっただろう。だが胡絮青はどれほどお金を積まれようと、離婚するつもりはまったくなかった。彼女は老舎に、復讐をしたのだ。

離婚の話を持ち出した老舎に、当時 15 歳の長男がくっつかかかった様子が、老舎が周恩来宛てた手紙に書かれていた。

中華人民共和国ができたあと、彼(周恩来)が言いました。「XX (K の息子) の革命はすべて私に向けられたようだ。XX は『どうして私の母さんが好きじゃないんですか。私の母さんがあなたに顔向けできないようなことを何かしましたか。』 と K を責めた

んだ。K は一言も返せなくて、それ以来二人の溝は深まったんだ。」

K は周総理に手紙を出して、その手紙のコピーを周総理が私にくれたのです。それにはこう書いてありました。「私が帰って来たのはある人のためでした。でも水の泡になりました。それゆえ、私にできるのはただ書くことだけで、私が何か書けるものがあるなら、それはすべてその人の精神的な支えになるでしょう。私は少しの友情を求めるだけでそれ以外には何も求めません。」

でも私はKには友情も与えなかったし、ほとんど手紙も書きませんでした。(原文B)

老舎はこのあと、良き家庭人であることを周囲から要求される「公人」となった。彼には目の前に敷かれたレールから外れた道を行く度胸はなかった。



左の写真はカメラマンに「笑ってください!」と言われて家族が笑顔を見せる中、老舎はどうしても笑顔を作ることができないような顔で写っている。右の写真は仲睦まじい夫婦の姿を演出しているが、実際には家庭の実権は妻が握っていた。老舎には自分で自由に使える金はなく、老舎の財産は妻に隠して作った貯蓄銀行に預けている金だけだった。

趙清閣は「友情も与えなかったし、ほとんど手紙も書きませんでした。」と言っているが、まったく交流が途絶えていたわけではなかった。老舎は彼女にしばしば手紙を書き、趙清閣も時に返信をしている。趙清閣には北京に住んでいる謝慧中という名の叔母がいて、その孫が老舎のことを「家庭を捨てようと思っていた男性である」と厳しく言い放った女流作家の韓秀(1946-)である。韓秀は趙清閣の姪ということになる。

韓秀(本名 Teresa Buczacki)の父親はアメリカ人、母親は中国人で、両親が離婚したために2歳のとき単身中国に来て祖母に育てられ、28年間を中国で過ごした。祖母の家と老舎の家が偶然近かったこともあり、趙清閣が老舎への手紙を祖母の家に郵送し、それを舒おじさん(老舎)のところに届けにいき、返事を趙清閣に送るという仲介役を果たしていたのだ。

老舎年譜の編集にあたっていた老舎研究の第一人者張桂興(漳州師範学院中文系教授)が、ある日資料の中から趙清閣宛ての老舎の手紙を多数見つけた。おそらく文革のときに紅衛兵に持ち去られていたものだろう。彼はこれらを発表しようとしたが、諸般の事情を考えてそのときは断念した。

だがそれからまた見つけた4通の手紙を読み、手紙を公表することを決心した。そして2007年、インターネット上に「談老舍与趙清閣的交往与友誼（老舍と趙清閣の友情を語る）」と題して発表した。その中の1通は趙清閣の50歳の誕生日に送られたものである。

清弟

もうすぐ誕生日ですね。あなたの健康を祈っています。楽しくありますように！
長いあいだ手紙をもらっていませんが、わざと書いてくれないのでしょうか。

ひょっとしたら私が書いたあの散文のせいではないでしょうか。

私に、あの過去の事を忘れて心から奉仕してほしいとあなたが望んでいるのではないかと考えています。

あなたはいつも他の人のために思って、手紙を出すという一つの権利さえも犠牲にしているのです。

あなたはそういう人なのです。自分が損をしても、決して人を引きこむようなことをしないのです。

あなたの友情に感謝します！

あなたがどう思おうと、私は手紙を書きたくなったら書きます。しかしもう無茶なことは言いません。もしあなたが、それで構わないと思うのであれば、時間のあるときに数行でいいから書いてくれませんか？

私はとても忙しくしています。足がまた悪くなりました。草々。祝。

長寿を祈ります！ 舍 一九五五年四月二十五日

もし手紙をくれるのであれば、ながながと弁論する必要はありません。

ただ自分の仕事のことについて話してくれればいいのです。そのことをとても知りたいのです！（原文C）

文面からは老舍が手紙を出しても趙清閣が返事を書いていないことがわかる。「清弟（弟の清へ）」という呼びかけは老舍特有のユーモアだろうか。老舍はそれから手紙を書き続けている。

反右派闘争、そして文革



開会の辞を述べる老舍

1950年5月に北京市芸術工作者連合会が成立し、その主席に任命されてからは、老舎は中国共産党の広告塔として休む間もなく働きつづけた。周恩来とは武漢の文協設立時代からの知り合いである。国賓待遇で自分を迎えてくれた周恩来には大きな恩義を感じていたし、彼を尊敬していた。

老舎のペンによる新中国と共産党への貢献は高く評価され、北京市人民政府から「人民芸術家」の称号を贈られた。1965年までの15年間で老舎が引き受けた公的な役職は20以上、使節団のメンバーとしてインド、朝鮮、ソ連に赴き、外国からの訪問団を迎える行事や国内の視察旅行団に参加し、数多くの文化講演会での演説をこなした。このように多忙を極める生活の中にあっても児童劇や京劇、オペラの脚本などを書き続け、長編、短編、散文も発表していた。自殺の前年には中国作家代表団の団長となって日本を訪れている。

老舎は精力的にペンを走らせていたが、徐々に自分の書きたいようには書くことができなくなり、自分の得意とする味わいのあるセリフや場面、描きたい背景の大幅な修正を要求された。時には老舎には何のことわりもなく脚本が変更されることもあった。政府としてはわかりやすく人民に共産党の宣伝をすることのできる脚本家が必要だったのだ。この件について林斤潤は語っている。

老舎の死の最大の原因はインストルメンタリズム(道具主義・概念道具説)にある。老舎はインストルメンタリズムの犠牲者だ。建国後、老舎は政治と密接に関わりを持ち、積極的に協力した。だから政治の上層部にいる者は彼を気に入った。人民芸術家、模範労働者、言語の大家と多くの称号を与えた。……しかし中国の政治の変化はあまりにも急激で政治活動は多すぎて、老舎の筆力は十分ではなく消化不良になり、疲れ、変化についていけなくなった。もともとはいい“道具”だったのに役に立たなくなった。錆びついた。役立たずになって錆びついたから、彼はだんだん冷遇されるようになり捨てられてしまったのだ。(原文D)

老舎が帰国して8年後に始まった農業と工業の大増産政策「大躍進政策」は、過大なノルマと経済の大混乱により4000万人の餓死者を出した。

「大躍進政策」とは、毛沢東が具体的に鉄鋼生産高でイギリスに追い付くことを指令し1958年から始められた政策で、全国60万か所に手製の炉が建設され、農民一億人が動員された。耐火レンガで作った鉄鋼炉で鍋やフライパン、包丁などを溶かして鉄の塊を作り出すというもので、農民は材料がなくなると農作業用の鍬や鋤、スコップなども炉に投げ入れなければならなかった。

この結果、燃料にするために木が伐採され森林が急激に減少し自然破壊が進み、農具を失った農民は農作業ができずに収穫物は減り、飢えた農民は野草や木の皮を剥いで食べた。二年間で餓死者は国家統計局のデータで四七七〇万人に達したとされている。

この政策の失敗の責任をとって国家主席の座を一時は退いた毛沢東は、最高権力者の座に返り咲くために、青少年で構成された紅衛兵を使った権力闘争を開始した。それが文革(文

化無産階級文化大革命)である。中国政府から公式に発表された文革の犠牲者は「死者 210 万人、身体障害者になった者 703 万人、破壊された家 7 万 1200 戸」だが、実際はこれよりも多い数であることは容易に想像できる。

文革が起こる 10 年前に、実はその下地となる政治運動が始まっていた。一九五六年から一九五七年にかけて「百家争鳴、百花齐放」と言われる運動が起こり、国民の声を聞いて政治を行うという姿勢を示すために、政府は「中国共産党に対する批判を歓迎する」という主旨の通達を出した。これを受けて国民は様々な意見を発表したのだが、これは共産党に批判する者をあぶり出すための作戦のようなものだった。このとき共産党を批判した者たちが「右派」とみなされ厳しく糾弾される「反右派闘争」が始まったのである。

老舎には文壇仲間の丁玲や胡風、呉祖光の批判をする任務が与えられた。老舎はこれを拒否することができず、批判文を発表した。拒否すれば自分が右派とみなされる可能性があったからだ。



2016 年 8 月 26 日付の北京晩報に「老舎と胡風は上辺だけの友人だったのか？」というタイトルの記事が載った。趙清閣との件が明るみにされて以来、文革当時の状況を知らない世代からは老舎のこのときの「裏切り行為」が批判されるようになってきた。胡風は詩人であり評論家で、文協で老舎と共に精力的に活動していた人物である。他の作家たちも胡風批判の記事を書いて発表したのに、なぜ老舎だけが厳しく批判されているのか。

老舎は北京文連の要職にある人物として、当時多くの厳しい批判文を書いた。その中には文壇に登場したばかりの新人作家たちの作品も含まれていた。老舎と同年輩の作家たちは、老舎がどれだけ鋭い表現を使おうとも、老舎の置かれている立場を思いやり黙って時をやり過ごした。胡風自身でさえ批判している老舎の気持ちを思いやっていた。

しかし若い作家たちは老舎の厳しい糾弾のことばに深く傷つけられた。その中の一人従維熙(1933-)は老舎の批判は不当なものだとずっと不満を持ち続けていたし、劉紹棠(1936-1997)は、老舎が自分への恨みを晴らすために批判したのだ、と思っていた。

彼はある作家会議で巴金、茅盾、曹禺、老舎が四大語言大師であると発表されたとき、「三人はそれに相当する」という発言をした。これは暗に「老舎には資格がない」という意味を

含んでいた。これが老舎の耳に入り自分は批判されたのだ、と言うのだ。これを受けて老舎研究家の傅光明が、老舎が当時彼を批判した記事を読み、次のように語っている。

老舎が劉紹棠に関して書いた批判記事や発言から見ると、老舎が彼に対して不快感を持って書いていることがはっきりと読み取れる。

だから同じ時期に書かれた老舎の作品を目の前にして、私はしばしば混乱してしまう。いったいどちらが本当の老舎なのだろう、どちらが真実の姿なのだろうかと。多分、両方とも本当の老舎なのかもしれない？（原文 E）

老舎は、表面上は非常に穏やかで善良な人間のように見えた。しかし、自分に対する批判を耳にしたり誇りを傷つけられたりしたら、その場では何も言わずに波風立てずにやり過ぎたが、実はいつまでも腹の中に抱えておく性格だった。そして何かを書く機会があったときに、表現の中に反論を潜ませるという方法をとって不満を表明していた。このときも、同じ方法をとって劉紹棠に反撃を加えたのだろう。



趙清閣のほうは建国後、上海で映画の脚本書きをして生計を立てていた。ところが1959年に上海映画製作所から「三面紅旗」のシナリオを書くように言われ、これを断ったら給料の支給が止まった。三面紅旗とは共産党が打ち出した「社会主義建設の総路線」「大躍進」「人民公社」の3つのスローガンのことである。

彼女はどうしてもなくなって、しかたなく老舎にこのことを告げる手紙を書いた。このときのことを韓秀が書いている。

上海から来た手紙（趙清閣からの手紙）は私が舒家（老舎の家）に届けました。舒おじさん（老舎）と一緒に花に水をやりながら、そっと彼に手紙を渡しました。彼は手紙を読むと奥さんに、私のおばあさんが病気だから見舞いに行かなくてはいけないと言って、部屋に入り、一枚上着をはおってから私の手を引いて外に出ました。私は八面槽貯蓄銀行の前で待っていました。彼は普通預金口座を解約して800元を引き出しました。

彼はいつもお金を持っていませんでした。私たちは二人でよく胡同の入り口で炒肝（豚の肝臓の炒めもの）を食べましたが、私がポケットから取り出す小銭のほうが彼のポケットにある小銭よりも多かったのです。彼はとても恥ずかしそうにしている、それで陶製の硯、文房具、書画などたくさんの物をくれました。何度もの災難に遭い、いま私の手元には日本の作家から贈られた小さな銅の水差しがあるだけです。

それでその日私は彼に、「こんな大金、どこから来たの」と聞きました。彼は原稿料だと言いました。こっそりと貯めていたのです。私の家に行くと彼は祖母に会い、すぐにお金を取り出し「上海に送ってください」と言いました。

祖母はその日、彼の名前を呼び捨てにしました。そして言いました。「あなたは清閣をだましたのです。彼女に落ち着く先ができると思わせたのです。あなたがそのようなことを言わなければ、彼女はこんな苦しみを味わうことはなかったのです。」

私は、清閣おばさんが舒さんのせいで大陸に留まったのだということをすでに知っていました。林語堂(1)たちと親しく、中華民国との関係も悪くありませんでした。彼女が大陸に留まる理由はほかには何もなかったのです。

舒先生は何も言わずに、悲しみに沈んだ顔をしていました。それは私が見た、最も無力な彼の姿でした。私がお金を上海に郵送しました。(原文 F)

老舎の性格を物語るもう一つのエピソードがある。

学生時代の韓秀

趙清閣と老舎の手紙の受け渡し役を担っていた韓秀は大学への入学を許可されなかった。それで1964年に北京市の43人の若者と一緒に山西省の公社大隊に移住して農業をすることにした。

ところが文革が始まり、公社の壁新聞に「アメリカと関係を持つスパイ嫌疑者が隠れている」という記事が書かれたのを知った。我が身に危険が迫っていることを察し、すぐに新疆ウイグル自治区に行くことを決めた。ちょうど新疆の生産建設兵団が人手を募っているということを知ったからだ。



18歳の少女が一人で決断し実行するところは、趙清閣おばさんの独立独歩の遺伝子が受け継がれているのかもしれない。(後にさんざんな苦勞をして彼女はやっとアメリカに帰国することができた。)

その韓秀が山西省に発つ直前、老舎に別れを告げに来た。老舎は「もう一度プーシキンの詩を朗読してくれ」と彼女に頼み、「喫飽穿暖」と書いた四文字を与えた。「たくさん食べて暖かくして過ごすように」という意味だろうか。

韓秀が行ってしまったらもう趙清閣の手紙を自分に届けてくれる人はなくなるのだ。自分と趙清閣をつないでいた細い線が切れてしまうことを悲しんだのだろうか。老舎は韓秀の前で大粒の涙をはらはらと落とした。

死に至る最後の道



自分の名前とその罪状が書かれたプラカードを首から掛けられている人々。

老舎が胡風たちを批判してから 10 年後、ついに老舎の名も批判される対象者のリストに載せられた。1966 年 8 月 23 日、老舎を含む 30 人あまりが紅衛兵たちに引っぱり出され、一列に並ばされ、首にプレートをかけられた。それからトラックに詰め込まれて孔子廟に連れていかれた。

紅衛兵たちは旧文化のシンボルである京劇の衣装や小道具に火をつけ、周囲に彼らをひざまずかせ、罵りながら殴打した。

老舎が家に帰ってきたとき、全身は血にまみれていた。

翌朝、家を出た老舎は再び家に戻ることはなかった。徳勝門外にある太平湖で老舎の溺死体が発見されたのは 25 日の早朝のことだった。24 日、太平湖公園の番人がベンチに朝から晩まで一日中座っていた老舎の姿を目撃していた。老舎は 24 日の夜中、太平湖に身を投げたのだ。



太平湖は 1971 年に埋め立てられ
現在は地下鉄車両置き場となっている。



観音庵胡同

老舎が身を投げた太平湖の近くには、かつて老舎が観音庵胡同に母のために買い求めた家があった。幼いとき彼はこのあたりで遊んでいた。

太平湖の前のベンチに座り、彼は母親の顔を思いだしたのだろうか。苦労して自分を育ててくれた母親を彼は尊敬し愛していた。だが、親不孝の限りを尽くしたと常に後悔していた。

「母を喜ばせるためにした結婚、友人たちに押し切られ世間体を考えてした結婚は、終生の足かせとなった。妻や子供よりも自分を優先して行動した結果、見事にしっぺ返しを食らった。これから家に帰っても、いたわりの声をかけてくれる人も暖かく迎え入れてくれる家族もない。

心から好きになった人には、孤独の中で一生を過ごすという、償っても償いきれないほどの悲しみを与えてしまった。三度のチャンスがあったのに自分はそのチャンスを自ら手放した。世間の批判を覚悟して彼女のもとに行っていたら……

胡風は、丁玲は、呉祖光は自分を許してくれるだろうか。あの批判は本心ではなかった。書きたくはなかった。でも書かなければいけなかったのだ、恐怖だった。ただ、ペンを手にしたら、最初のうちは動きが鈍かったのに、いつの間にかすらすらと書けるようになった。

